

令和5年度 第2回 学校運営協議会 報告

1. 日時:令和5年10月26日(木)14:00~16:45

2. 出席者

(1) 学校運営協議会委員

【委員①】元特別支援学校校長(委員長)

【委員②】自治会副会長(地域コーディネーター)

【委員③】一般企業常務取締役(地域コーディネーター)

【委員④】卒業生保護者

(2) 校内教職員

校長 教頭 事務長 幼稚部主事 小学部主事 中学部主事 支援部主任

3. 会議次第

(1) 校長挨拶

(2) 学校経営 前期評価(成果と課題)・後期の重点

(3) 地域と連携した各部の取組報告(第1回学校運営協議会を受けての活動について)

(4) 委員からの提言

(5) グループ協議「百周年を迎えた学校の新たな取組と聴覚支援学校に期待すること」

(6) 校長挨拶

4. 協議等記録

○校長あいさつ

百周年ということでいろいろな活動に取り組んできた。また、それに絡めて、学校に多くの方にお越しいただいた。地域の方と触れ合う中で子ども達を伸ばしていきたい。

記念式典が迫ってきた。子ども達は一生懸命練習しているので、ぜひその姿を見ていただきたい。101年目を迎える、子どもの数が減ってきている。昭和20、30年代100名を超える児童生徒、70名以上の舎生がいた。今後も減ることが予想される。子どもの数が少ないからこそできることを考えていきたい。外の方とのつながりなど、グループ協議ではこの学校として今後の取組について御意見をいただきたい。

○学校経営 前期評価(成果と課題)・後期の重点

〈小学部〉

コミュニケーションの基本を大切に取り組みたい。相手の考えの根拠を知って多様な考え方を認め合う。人数が少ないので学級を超えての活動、相手の意見を聞く姿勢も養いつつある。ICT、一人一台タブレット、使い方には子ども達も教員も慣れてきた。Zoom を使って今後静岡、沼津聾学校と国語の授業交流を考えている。

校外学習も充実してきた。事前・事後の学習も充実するという意識が持てた。

〈中学部〉

いきいきについて、生徒も教員も対話を意識している。授業の中での対話、生徒同士、ICTを使って自分と向き合う、インターネットの情報と向き合うなかで、自分の意見の発信。教員の中での対話、職員室などで。

わくわくについて、手話力の向上、高等部に向けて手話力の向上を目標としている。それぞれ意識しながら指導しているが、まだまだの部分も。教員が手話を使う、集会などでの通訳も積極的に。生徒、教員ともに手話力の向上を目指している。

ICTの活用、デジタル教科書、電子黒板……。生徒数が減っているため静岡、沼津聴覚と連携、それぞれの意見の発信も試行している。

しなやかについて、キャリア教育、進路指導、段階的に見学、体験、高等部体験など、自分の将来像を見ていく。生徒の実態も様々、図書館、A型事業所など、見学先も工夫している。百周年に向けて、昨年度より取り組んでいる。自分たちの力で作り上げる、生徒が主体的にできるよう勧めている。

〈幼稚部〉

遊びがひろがる元気な幼稚部として活動している。

いきいきについて、豊かな心をはぐくむ、今年10人、女の子も入り集団が大きくなり子ども同士のかかわりもみられるように。ただ、実態差が大きい、身辺自立、もっていることばなど。ビデオ等見ながらグルーピング等工夫していきたい

わくわくについて、教員6人中2人が新任、授業等もTTで実践、OJT 幼児教育、発達心理等幼稚部として必要なことを学んでいく。ことばをはぐくむために実体験が大切、多くの活動を取り入れている。自然に触れながら親子の関係づくり、地域の方とのつながり、せっかくの自然を生かした活動を考えていきたい、家庭と保護者との連携、保護者の力が大きい。

〈支援部〉

地域にいる赤ちゃんから高校生までを対象としている。地域の学校に通う子ども達は、在籍校への支援を行っている。在籍校や関係機関との連携強化を行い、そこからまた新たな紹介を受けたりもしている。地域の学校に通う子ども達にとっては、保護者の力がとても大きくかかわってくる。そのため、小学生、中学生には保護者との連携をさらに強化している。

〈各分掌〉

教務課 読書活動による言語活動の基礎作りを重点に主体的に本を借りて読む姿が多く見られた。後期は各学部と連携して有意義な図書委員会の持ち方を検討したい。

研修課 前向きに授業に取り組んでいる生徒が増えている。後期は授業公開を実施することで聴覚障害教育の専門性と教科指導力のアップができるようにしたい。

自立活動課 前期は予定通り遂行できた。後期はコース別学習会など自立活動課員が課題意識をもち、きこえの冊子の改訂、補聴器の調整、ロジャーの取説作りなど行う。

保健体育課 自分の命を守るために熱中症対策や思春期講座など、年齢に応じた指導を行った。緊急時の初動体制を理解し、模擬体験をしながら対応について共通理解した。後期は学部ごとにフローチャートを見直し、シュミレーションや模擬体験を行う。

情報教育課 一人一台端末活用推進のため、管理方法の変更やWI-FIかんきょうの整備を行った。今後は授業だけでなく、朝・帰りの会や家庭学習も含め、活用を進めたい。

生徒指導課 人権感覚を高め、学部、学級を中心に自他ともに大切にしたかわりの指導に取り組むことができた。また、安心安全な生活のための環境、体制づくりとして、訓練や学習会を行い、マニュアルや体制の整合性を図ることで、行動の確認ができた。後期もマニュアルの周知と修正を継続していく。

寄宿舎 舎生が主体的に話し合いをすることができた。補助手段を付けて、相手に伝わるように話すことを徹底していきたい。

○地域と連携した各部の取組報告(第1回学校運営協議会を受けての活動について)

〈幼稚部〉

- ・校内の竹を使った取り組みができないか。高林さんに来ていただいて親子で鶯笛を作った。幼稚部に難しいかと思ったが保護者とともに頑張り「ホーホケキョ」と音を出すことができた。
- ・坂本さんの協力で、フィールの買い物では、地域の方と一緒に自分でお金を支払った。
- ・白澤さんの両親教室、保護者も楽しみにしている。

〈小学部〉

- ・坂本さんの紹介、5年生の社会科と関連して田植え、稲刈り体験、教科書の学習をそのまま体験することができた。子ども達に好評、今後もこういった体験を大切にしていきたい。
- ・ユニクロ、難民に子ども服を送る活動、段ボール5箱分集まっていてそろそろ送る予定。
- ・ユーコープ、社会科バックヤードの見学など。教科書の学びを体験と結び付けて確かめた。
- ・卒業生、デフサッカー選手、同じ内容でも教員が話すより子ども達に響く。

〈中学部〉

- ・職場見学、職場体験、生徒の目標に合わせて体験先を考えている。就労支援 A 型こなこなは保護者も参加し、生徒も保護者も将来像を見ることができた。中 2 は図書館で集団実習を実施。来年度以降は個別でもと思っている。受け入れ先等紹介していただけるとありがたい。
- ・戦争を語り継ぐ会、教員も初めて聞く話、生徒にも響くものがあった。
- ・ビジネスマナー講座、百周年の司会受付など、浜松いわた信用金庫を招いて行う。百周年がきっかけであったが、今後の受験等でも必要なこと、継続していけるとよい。
- ・100周年の歴史、鈴木さん、伊藤さん、貴重な話を伺うことができた。
- ・12月白澤さん、同じことでも年齢の近い先輩の話は生徒に響く。ぜひお話を伺いたい。
- ・城北分校の作業学習を見学し、百周年の封筒印刷などで活用している。
- ・地域との連携として、今までコロナでできていなかった行事を復活できたことも大きい。修学旅行も京都奈良へ。聾学校の卓球大会、3聾、関聾12校と同じ部活での大会に参加することもできた。

○委員からの提言

委員③: 幼稚部から中学部まで、年齢の幅、実態がさまざまな中、IT 化が進んでいることを感じた。IT を活用することで、今までできなかったことができるようになっていく。そればかりに頼ってはいけませんが、タブレット等活用していけるとよい。今まで以上に医学も進んでいる、この先社会全体が変わっていく。学校も変わっていく必要がある。社会の変化に対応するようにアンテナを高くしておかないといけない。

委員④:百周年は節目の行事。子ども達にとってはなかなか体験できることではないので、特別なことを目いっぱい体験させていただきたい。

委員②:地域連携した学習の取り組みをみて、活動的にやっていることが分かった。この先の進路はどうなっているのか。就職などはどうなっているのか。

中学部主事:沼聴高等部、他県高等部、地域の高等学校、通信制等進路は様々。沼聴高等部に行った生徒の多くは地元に戻って就職しているケースが多い。

委員②:病院、介護の世界では人手不足が現実、そのようなところへの就職もあるのかな

中学部主事:沼聴高等部は情報科でパソコンの資格などを取ると、事務的な作業に就くことが多い。名古屋聾高等部には、機械科、デザイン科など、機械制御の免許など資格を取得して現場で働くケースが多い。どの学科にいくかにもよるが、それぞれのあったところで就職している。

委員①:昔の卒業生はホワイトボードなど持ってきて筆談していることがあったが、最近はスマホに文を入力してきて話をする。日本は比較的文字だけのことが多いが、海外では音声、文字併用が多い。文字を入力してしゃべってくれるようになると、画面を見せるという手間もなくなる。世の中の情報の80%は視覚からといわれている、ICT化などにより90%ぐらいになっているかもしれない。逆に言うと聴覚障害があっても80%の情報はとれるということ。聴覚障害の方の生活も変わってくるだろうと思う。

30年以上も前の話になるが、携帯でショートメールを打てるようになった。離れていてもメールなら連絡を取り合えるので、修学旅行では生徒だけの班行動が実施できた。驚いたのは宿での小遣い帳の記録、生徒は携帯を取り出し、携帯のメモ機能を活用していて、それを見ながら写していた。当時、携帯の活用が一番進んでいたのではないだろうか。メールの普及で救われたのが聴覚障害の人たちではないか。もし聴覚障害者のために開発しようとするが高価になるが、社会全体に向けたものであったので普及したことが大きい。視覚情報が優位になってくると聴覚障害者にとっては生活しやすくなる。

ITの進歩が聴覚障害者にとって、障がい者全体にとってよい方向に進んでいくのではないか。

○グループ協議

〈1班〉

在籍数の減少する中、社会自立を目指して存在感ある学校づくりが必要。

聴覚障害者は離職率が高いといわれている。世の中が大きく変化している中、多くの業種が変わってきている。ICTを活用したコミュニケーションの技能を身につけることが、聴覚障害者の不利な点を補えるツールとなる。

〈2班〉

地域コーディネーターとして、学校の活動等を地域に発信していくことが必要と考え、自治会の定例会等で本校の活動を発信していただいている。学校会場のコンサートにも地域の方が来ていただいた。今後、門松づくり、おまつりなど、地域の行事に学校もかわり、タケノコ堀りなど学校の資源も使っていただくことで、地域の方との関係が持てるとよい。

〈3班〉

ICT、AI が普及し、予測困難な社会を生きていくために、ICT、タブレットの活用は不可欠。その利便性と課題を理解した上で昔ながらのやり方も必要。変わっていくところ、変わらずに大切にしていくことを両立させていく。変わらないものとして心豊かに育てていくこと、委員④のお話の中で、大学生として、バイト生活を通してなど実社会の中での障害者として対応されたりなど、外へ出ないと気付かないこと、外へ出ることで気づくこと、向き合うこと、折れない心を身に着けることが大切とのこと。生活体験、実体験を通して中学部のきめ細やかな指導(学力、折れない心)継続していきたい。

○校長より

各グループで今後の学校について語り合うことができたのがありがたい。

記念式典を1つの区切りとして新たな学校を築いていきたい。

変わらないこと、変わらなければならないこと、社会の変化にアンテナを高くしなければならぬ。今、子ども達に何を教えなければならないのかを見据え、指導していきたい。

次回2月15日 13時30分より